白隱禪師著
穆軒道人校

夜船閑話

全

216
815

東京
大阪
文友堂藏版

特61
254

白隱禪師著
穆軒道人校

夜船閑話

全

明治
42 9 28
内交

東京
大阪
文友堂藏版

白隱禪師小傳

禪師名は慧鶴、字は白隱、駿河駿東郡浮島ヶ原杉山氏の子にして、貞享二年十二月二十五日に生る。元祿十二年二月二十五日、十五歳にして、松蔭寺の單嶺傳公に謁して得度す。寶永元年、美濃の瑞雲寺に至り、馬翁に侍し、後、四方に周遊して、諸老を訪ひ、參問切至せり。五年、越後高田の英巖寺に至り、座禪考察少しも倦まず、一夜恍然として曉に達し、乍ち遠寺の鐘聲を聞き、豁然省發し、後、宗格禪人に由りて、信州飯山の正受菴端公に見え、機鋒交觸、釋然大悟し、以後勤勉努力、毫も撓まず、還りて松蔭寺に居る、時に年二十四、既にして禪師參學に勞して病に罹り、將に廢人とならんとす、是に於て山城白河山中の白幽眞人に就き、內觀修養の訣を聞き

專ら療養して癒ゆ。享保二年、松蔭寺の主となり、翌年華園第一座の位に轉じ、透鱗の法嗣となる。後、名聲海内に遍く、參請の徒、庵を結びて、村里に散居する者、常に百餘人、諸方推して一代の龍門となす。寶暦八年、伊豆の龍澤寺を創めて、其の開祖となる。明和五年十二月十一日寂す。壽八十四、六年六月八日、勅諡神機獨妙禪師を賜ふ。明治十七年五月廿六日、勅諡正宗國師を賜ふ。禪師兼て雜畫を好み、道歌を咏じ、畫賛を作りて人を敎導す。其の畫亦能手なりといふ。著はす所、槐安國語、荊叢毒蘂、闡提紀聞、息耕錄、夜船閑話、開筵普說、寒林貽寶、寶鑑貽照、辻談義、書賛搖船、假名法語、著作語錄、藻鹽草、左之母草、壁生草、遠羅天釜、八重葎、毒爪牙、粉引歌等數十種あり。

白隱禪師 夜船閑話序

窮乏菴主饑凍選

寶暦丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く草書を裁して、吾が鵠林近侍の左右に寄せて云く、伏して承る、老師の古紙堆中、夜船閑話とかや

云へる草稿あり。書中多く氣を錬り精を養ひ、人の營衛をして充たしめ、專ら長生久視の秘訣を聚む。謂ゆる神仙錬丹の至要なり。と、是故に世の好事の君子是をおもふこと、荒旱の雲霓の如し。偶く雲水の徒侶竊かに傳寫し來るあるも、秘重し珍藏して、人をして見しめず。天瓢むなしく櫃にをさめて匿し

たるが如し。願くは是を梓に壽がうして、以て其渇を慰せん。聞く、老師、常に人を利するを以て、老後を樂しみたまふ。と、若夫人に利あらば、師、豈に是を吝しみたまはんや。と、二虎含み來て師に呈す。師、微々として笑ふ。此において諸子、舊書櫃を開けば、草稿蠹魚の腹中に葬らるゝもの中に過ぎたり。諸子、卽ち訂

正傳寫して、既に五十來紙を見る。即ち封裹して、以て京師に寄せんとす。予が馬齒、一日も諸子に長たるを以て、其端由を書せんことを責む。予も亦辭せずして書す。云く、師、鵠林に住すること、大凡四十年、鉢嚢を掛けしより以來、雲水參玄の布衲子、纔かに門閫に跨れば、師の毒涎を甘なひ、痛棒を滋しとして、辭

し去ることを忘るゝもの、或は十年、或は二十年、鵠林々下の塵となることも亦總に顧みざる底あり。盡く是叢林の頭角、四方の精英なり。各〻西東五六里が間に分れて、舊舍廢宅、老院破廟借て、以て菴居の處として、清苦す。朝艱暮辛、晝餒夜凍、口に投ずるものは、菜葉麥麩、耳に觸るゝものは熱喝垢罵、骨に徹

するものは嗔拳痛棒、見るもの額を攢め、聞くもの肌汗す。鬼神もまた涙を浮へつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其初め來る時は宋玉河晏が美貌有て肌膚光澤凝れる膏の如くなるものも、久しからず、して恰も杜甫、賈嶋が形容枯槁顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧ざる

底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂しみ有てか、片時も湊泊することを得んや。是故に往々に參窮度に過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渇して、疝癖塊痛、難治の重症を發せんとす。是を憐み、是を愁て、師不豫の色有るもの連日、乍ち忍俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞

つて、是に授るに内觀の秘訣を以てす。乃ひ云く、若是參禪辨道の工士、心火逆上し、身心勞疲し、五内調和せざることあらんに、鍼灸、藥の三つを以て是を治せんと欲せば、縱ひ華陀扁倉といへども、輙く救ひ得ること能はじ。われに仙人還丹の秘訣あり。你が輩試にこれを修せよ。奇功を見ること、雲霧を披いて

皎日を見るが如けん。若し此秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を拈放して、先須らく熟睡一覺すべし。其未だ睡りにつかず、眼を合せざる以前に向て、長がく兩脚を展べ、強よく踏みそろへ、一身の元氣をして、臍輪氣海、丹田腰脚、足心の間に充たしめ、時々に此觀を成すべし。我が此氣海丹田腰

脚足心、總に是我が本來の面目、々々何の鼻孔かある。我が此氣海丹田、總に是我が本分の家鄉、々々何の消息かある。我がこの氣海丹田、總に是我が唯心の淨土、々々何の莊嚴かある。我がこの氣海丹田、總に是我が己身の彌陀、々々何の法をか說く。と、打返へし〳〵常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つも

らば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下瓠然たることいまだ篠打ちせざる鞠の如けん。恁麼に、單くに妄想し、將ち去て、五日七日乃至二三七日を經たらむに、從前の五積六聚氣虛勞役等の諸症、底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り、將ち去れ。此において、諸子歡喜作禮して、密々に精修す。

各〳〵悉く不思議の奇功を見る。功の遲速は進修の精麁に依るといへども、大半皆全快す。各〳〵内觀の奇功を讃嘆して休まず。師の曰く、你が輩心病全快を得て、以て足れりとすることなかれ。轉た治せば、轉た參ぜよ。轉た悟らば、轉た進め。老僧初め參學の時、難治の重病を發して、其憂苦、諸子に十倍せり。進

退惟谷まる、尋常心にひそかに思惟すらく、生きて此憂愁に沈まんよりは、如かじ早く死して、此革囊を捨んには。と、何の幸ぞや、此の内觀の秘訣をつたへて全快を得ること、今の諸子の如し。至人の云く、此は是神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歲なるべし。其餘は計り定むべからず。予則ち歡喜に堪

へず、精修怠らざる者、大凡三年、心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なることを覺ゆ。此において重ねて心に竊かに謂へらく、縱ひ此眞法を修し得て、彭祖が八百の歲時を保ち得るも、唯是一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ老狸の舊窠に睡るが如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ、今すでに獨りも葛洪、鐵拐、張

華、費張が輩を見ず。如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行し、虛空に先つて死せず、虛空に後れて生せざる底の不退堅固の眞法、身を打殺し、金剛不壞の大仙身の成就せんには。と、此において眞正參玄の上士兩三輩を得て、內觀と參禪と共に合せ並らべ貯へて且つ耕へし、且つ戰ふ

者、蓋し茲に三十年、年々一員を添へ、二肩を增し得て、今すでに二百衆に近かし。其中間方來の衲子、勞屈疲倦の族、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底を憐み、密かに此內觀の至要を傳授し立所に快癒せしめ、轉た悟れば、轉た進ましむ。馬年、今歲古稀に越えたりといへども、半點の病患なく、齒牙全く搖落

せず、眼耳次第に分明にして、動もすれば、靉靆を忘る、每月兩度の法施終に怠倦せず、請に佗方に應じて、三百五百の海衆を聚會して、或は五旬七旬を經に、錄に、雲水の所望に隨て、胡說亂道する者、大凡五六十會に及ぶといへども、終に一日も罷講齋を鎖さず、身心健康、氣力は、次第に二三十歲の時には遙かに

勝されり。是、皆、彼の内觀の奇功に依る事を覺ゆ。住菴の諸子、各〱悲泣作禮して云く、吾が師、大慈大悲願くは、内觀の大畧を書せよ。書して留めて後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師即ち頷す。立處に草稿成る、稿中何の說く處ぞ、曰く、大凡生を養ひ、長壽を保つの要は形を錬るにしかず、形を錬るの要、神

氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝る則は氣聚る。氣聚る則は卽ち眞丹成る。丹成る則は形固し。形固き則は神全し。神全き則は壽がし。是仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざることを。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ。住菴

の諸子、此心要を勤めて、はげみ進んで怠らずんば、禪病を治し、勞疲を救ふのみにあらず、禪門向上のことに到て、年來疑團あらむ人々は、大いに手を拍して、大笑する底の大歡喜有らむ。何が故ぞ、月高して城影盡く。

維時寶暦丁丑孟正廿五蓂

窮乏菴主飢凍灶香稽首題

白隱禪師　夜船閑話

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道情を激起し、精錬刻苦する者、既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す。從前多少の疑惑根に和して、氷融し、曠劫生死の業、根底に徹して漚滅す。自ら謂らく、道、人を去ること寔

に遠からず。古人二三十年、これ何の捏怪ぞ。と怡悦踏舞を忘るゝ者數月、向後日用を廻顧するに、動靜の二境、全く調和せず、去就の兩邊總に脫洒ならず。自ら謂らく猛く精彩を着け、重て一回捨命し去んと越いて牙關を咬定し、雙眼睛を瞠開し、寢食ともに廢せんとす。既にして未だ期月に亘らざるに、心火逆

上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、擧措恐怖多く、心神困倦し、寐寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に淚を帶ぶ。此において遍く明師に投し、廣く名醫を探るといへども、百藥寸功なし。或人曰く、城の白河の山裏に、巖居せる者あり。世

人是を名けて、白幽先生と云ふ。靈壽三四甲子を閲みし、人居三四里程を隔つ。人を見ることを好まず。行く則は必ず走て避く、人其賢愚を辯ずる事なし。里人專ら稱して仙人とす。聞く故の丈山氏の師範にして、精く天文に通じ、深く醫道に達す。人あり禮を盡して、咨叩する則は稀れに微言を吐く。退いて是を

考るに、大いに人に利あり。と、此において寶永第七庚寅孟正中浣、竊かに行纏を着け、濃東を發し、黒谷を越え、直ちに白川の邑に到り、包を茶店におろして、幽か巖栖の處を尋ぬ。里人遥かに一枝の溪水を指す。即ち彼の水聲に隨て、遥かに山溪に入る。正に行くこと里ばかりに乍ち流水を蹈斷す。樵徑もまたな

し。時に一老夫あり。遥かに雲煙の間を指す。黄白にして方寸餘なる者あり。山氣に随て、或は顯はれ、或は隱る。是幽か洞口に垂下する所の蘆簾なり。と、予卽ち裳を褰げて上る。巉巖を蹈み、蒙茸を披けば氷雪草鞋を咬み雲露衲衣を壓す。辛汗を灑し、苦膏を流して、漸く彼の蘆簾の處に到れは、風致淸絶實に物哀

に丁々たることを覺ゆ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰栗す。且らく巖根に倚て、數息する者數百、少焉あつて衣を振ひ、襟を正して、畏づ〳〵鞠躬して、簾子の中を望めは朦朧として、幽が目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂て膝に到り、朱顏麗うして棗の如し。大布の袍を掛け、輭草の席に坐せり。窟中纔かに方五六笏に

して、全く資生の具無し。机上、只中庸と老子と金剛般若とを置く。予則ち禮を盡して、苦ろに病因を告げ、且つ救ひを請ふ。少焉幽眼を開いて、熟々視て、徐々として告げて曰く、我は是山中半死の陳人、樝栗を拾て食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此外更に何をか知らんや。自ら愧づ、遠く上人の來望を勞する事を。予卽ち

夜船閑話

轉た咨叩して休まず、時に幽恬如として、予が手を投らへて精しく五內を窺ひ、九侯を察す、爪甲長こと半寸、慘乎として額を攅めてつげて云く、已哉、觀理度に過ぎ、進修節を失して、終に此の重症を發す。實に醫治し難き者は、公の禪病なり。若し鍼、灸、藥の三つの物を恃んで、而して後に是を救はんと欲せば、扁

倉力をつくし、華陀額を攢むるも、奇功を見ること能はじ、公、今、既に觀理の爲に破らる。勤めて內觀の功を積まずんば、終に起つこと能はじ。是波の起倒は必らず地に依るの謂なり。予が曰く、願くは內觀の要祕を聞かん。學びがてらに是を修せん、幽肅々如として容をあらため、從容として告て曰く、嗚呼公の

如きは問ふ事を好むの士なり。我が昔し聞ける處を以て微しく公に告んか、是養生の祕訣にして、人の知る事稀れなり。怠らずんば必ず奇功を見、久視も亦期しつべし。夫、大道分れて、兩儀あり。陰陽交和して人物生る。先天の元氣、中間に默運して五臟列り、經脉行はる。衞氣營血互に昇降循環する者、晝夜に大

凡五十度、肺金は牝藏にして膈上に浮び、肝木は牡藏にして、膈下に沈む。心火は大陽にして、上部に位るし、腎水は大陰にして下部を占む。五臟に七神あり。脾腎各〻二神を藏くす。呼は心肺より出で、吸は腎肝に入る。一呼に脈の行くこと三寸、一吸に脈の行くこと三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり。脈

一身を巡行すること五十次、火は輕浮にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして、常に下流を務む。若、人察せず。觀照或は節を失し、志念或は度に過る則は、心火熾衝して、肺金焦薄す。金母苦るしむ則は、水子衰減す。母子互に疲傷して、五位困倦し、六屬凌奪す、四大增損して、各〻百一の病を生ず。百藥功を立つ

ることと能はず。衆醫總に手を束ねて、終に告る處なきに到る。蓋し生を養ふことは國を守るが如し。明君聖主は常に心を下に專にし、暗君庸主は常に心を上に恣にす。上に恣にする則は、九卿權に誇り、百僚寵を恃んて曾て民間の窮困を顧ることなし。野に菜色多く、國に餓莩多し。賢良潜み竄れ、臣民瞋り恨む。

諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて、終に民庶を塗炭にし、國脉永く斷絶するに到る。心を下に專らにする則は、九卿儉を守り、百僚約を勤めて、常に民間の勞疲を忘るゝこと無し。農に餘まんの粟あり。婦に餘まんの布有て、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民肥え、國強く、令に違するの烝民なく、境ひを侵すの敵國な

し。國刁斗の聲を聞く事なく、民戈戟の名を知らず。人身もまた然り、至人は常に心氣をして下に充たしむ。心氣下に充つる則は、七凶内に動く事なく、四邪また外より窺ふこと能はず。營衛充ち、心神健かなり。口、つひに藥餌の甘酸を知らず。身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流は常に心氣をして上に恣にす、上に

恣にする則は、左寸の火、右寸の金を尅して、五官縮まり疲れ、六親苦るしみ恨む。是故に漆園曰く、眞人の息は、是を息するに踵を以てし、衆人の息は是を息するに喉を以てす。許俊が云く、蓋し氣下焦に在る則は、其息遠く、氣上焦に有る則は、其の息促まる。上陽子が曰く、人に眞一の氣有り、丹田の中に降下する

則は、一陽また復す。若人始陽初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是が信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならんことを要し、下部は常に溫煖ならんことを要せよ。夫經脉の十二は、支の十二に配し、月の十二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、一歲を全うするが如し。五陰上に居し、一

陽下を占む。是を地雷復と云ふ。冬至の候なり。眞人の息は、是を息するに踵を以てするの謂か、三陽下に位ゐし、三陰上に居す。是を地天泰と云ふ。孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで、百卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象、人是を得る則は、營衞充實し、氣力勇壯なり。五陰下に居し、一陽上

に止まる。是を山地剝といふ。九月の候なり。天是を得る則は、林苑色を失し、百卉荒落す。是衆人の息は、是を息するに喉を以てするの象、人是を得る則は、形容枯槁し齒牙搖落す。所以に延壽書に云く、六陽共に盡く、則是全陰の人死し易すし。須らく知るべし、元氣をして常に下に充しむ。是生を養ふ樞要なる事

を。昔し呉契初石臺先生に見ゆ。齋戒して鍊丹の術を問ふ。先生の云く、我に元氣眞丹の神祕あり。上々の器にあらさるよりんは得て傳ふべからず。古しへ黃成子是を以て黃帝に傳ふ。帝三七齋戒して是を受く、夫大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり。你ぢの六欲を去け、五官各く

其職を忘るゝ則は、混然たる本源の眞氣彷彿として、目前に充つ。是彼の大白道人の謂ゆる我が天を以て、事る所の天に合する者なり。孟軻氏の謂ゆる浩然の氣、是をひきゐて臍輪氣海丹田の間に藏めて、歳月を重ねて是を守て、守一にし去り、是を養て無適にし去て、一朝乍ち丹竈を掀飜する則は、內外中間、

八紘四維、總是一枚の大還丹、此時に當て、初て自己即ち是天地に先つて生ぜず。虛空に後れて死せざる底の眞個長生久視の大神仙なる事を覺得せん。是を眞正丹竈功成る底の時節とす。豈に風に御し、霞に跨がり、地を縮め、水を蹈む等の鎖末たる幻事を以て懷とする者ならんや。大洋を攪いて酥酪とし、厚

士を變じて黃金とす。前賢曰く、丹は丹田なり。液は肺液なり。肺液を以て丹田に還へす。是故に金液還丹といふ。予が曰く、謹んで命を聞いて、且らく禪觀を抛下し、努め力めて治するを以て期とせん。恐るゝ處は李士才が謂ゆる淸降に偏なる者にあらずや。心を一處に制せば、氣血或ひは滯碍する事なからむ

か、幽微々として笑て云く、然らず、李氏いはずや、火の性は炎上なり。宜しく是を下らしむべし。水の性は下れるに就く、宜しくこれをして上らしむべし。水上り、火下る。是を名けて交と云ふ。交る則は既濟とす。交らざる則は、未濟とす、交は生の象、不交は死の象なり。李家が謂ゆる淸降に偏なりとは、丹溪を學ぶ

者の弊を救はんとなり。古人云く、相火上り易きは、身中の苦るしむ所、水を補ふは火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり。君火は上に居して、靜を主さどり。相火は下に處して、動をつかさどる。君火は是一心の主なり。相火は宰輔たり。蓋し相火に兩般あり。謂ゆる腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は龍に

比す。是故に云ふ、龍をして海底に歸せしめは、必ず迅發の雷なけん。但し雷をして澤中に藏れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海か澤か、水にあらずと云ふ事なし。是、相火上り易きを制するの語にあらずや。又曰く、心勞煩する則は、虚して心熱す、心虚する則は是を補するに心を下して以て腎に交ふ。是を補と云

ふ。既濟の道なり。公、先に心火逆上して、此重痾を發す、若し、心を降下せずんば、縱ひ三界の祕密を行し盡したりとも、起つことを得じ。且つ又我が形模道家者流に類するを以て、大いに釋に異なる者とするか、是禪なり。他日打發せば、大いに笑すべきの事有らむ。夫、觀は無觀を以て正觀とす。多觀の者を邪觀とす。

向きに公多觀を以て、此重症を見る。今是を救ふに無觀を以てす。また可ならずや。公、若し、心炎意火を收めて、丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較志想なく、一滴の識浪情波なけん。是眞觀清淨觀なり。云ふことなかれ、しばらく禪觀を抱下せん。と、佛の言はく、心を足心にをさめて、能

く百一の病を治す。と、阿含に酥を用るの法あり、心の勞疲を救ふ事尤妙なり。天台の摩訶止觀に病因を論ずる事甚だ盡せり。治法を説く事も亦甚だ精密なり。十二種の息あり。よく衆病を治す。臍輪を緣して、豆子を見るの法あり。其大意心火を降下して、丹田及び足心に收るを以て至要とす。但、病を治するの

みにあらず。大いに禪觀を助すく、蓋し繫緣締眞の二止あり。締眞は實相の圓觀、繫緣は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす。行者是を用るに大いに利あり。古しへ永平の開祖師、大宋に入て、如淨を天童に拜す。師一日密室に入て益を請ふ。淨曰く、元子坐禪の時、心を左の掌の上におくべし。と、

これ即ち顗師の謂ゆる繋縁止の大畧なり。顗師初め此の繋縁內觀の祕訣を敎へて、其家兄鎭愼が重痾を萬死の中に助け救ひたまふ事は、精しくは小止觀の中に說けり。また白雲和尙曰く、我つねに心をして腔子の中に充たしむ。徒を匡し、衆を領し、賓を接し、機に應じ及び小參普說、七縱八橫の間において、

是を用ゐてつくる事なし。老來殊に利益多き事を覺ゆ。と、寔に貴ぶべし。是蓋し素問にみゆる、恬澹虛無なれば、眞氣是にしたかふ精神內に守らば、病何れより來らむといふ語に本づき給ふ者ならむか。且つ夫內に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髮ばかり

も欠缺の處なからしめん事を要す。これ生を養ふ至要なる事を知るべし。彭祖が曰く、和神導氣の法當さに深く密室を鎖ざし、牀を案じ席を煖め、枕の高かさ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の中に閉ざし、鴻毛を以て鼻上につけて動かざる事三百息を經て、耳聞處なく、目見る處なく、斯の如くなる

則は寒暑も侵かす事能はず、蜂蠆も毒する事能はず。壽き三百六十歳、是眞人に近かしと、又蘇內翰が曰く、已に飢ゑて方に食じ、未だ飽ずして先止む。散歩逍遙して務めて腹をして空からしめ、腹の空なる時に當て即ち靜室に入り、端坐默然して出入の息を數へよ。一息よりかぞへて十に到り、十より數へて

百に至り、百より數へ放ち去て、千に至りて、此身兀然として、此心寂然たる事虛空と等し。斯のごとくなる事久うして、一息おのづから止まる、出でず入らざる時、此息八萬四千の毛竅の中より、雲蒸し、霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼を

開くが如けん。此時人に尋ねて、路頭を指す事を用ひず、只要す、尋常言語を省畧して、爾ちの元氣を長養せん事を。是故に云ふ、目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に默す。と、予が曰く、酥を用るの法得て聞いつべしや。幽が曰く、行者定中四大調和せず、身心ともに勞疲する事

を覺せば、心を起して應さに此想を成すべし。譬へば色香清淨の輭蘇鴨卵の大いさの如くなる者、頂上に頓在せんに、其氣味微妙にして、遍く頭顱の間をうるほし、浸々として潤下し來て、兩肩及雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝、腸胃、脊梁臀骨次第に沾注し將ち去る。此時に當て、胸中の五積六聚、疝癖塊痛、心に隨て降

下する事、水の下につくがごとく、歷々として聲あり。遍身を周流し、雙脚を溫潤し、足心に至て即ち止む。行者再び應さに此觀を成すべし。波の浸々として、潤下する所の餘流積もり湛へて暖め蘸す事、恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是を煎湯して、浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪已下を漬け蘸すが

如し。此觀をなすとき、唯心所現の故に、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄かに玅好の軟觸を受く、身心調適なる事、二三十歲の時には遙かに勝れり。此時に當て、積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生す。若其勤めて怠らずんば、何れの病か治せざらむ。何れの德かつまざらん。何れの仙か成ぜざる。

何れの道か成ぜざる。其功驗の遲速は、行人の進修の精麁に依るらくのみ。走始め丱歲の時、多病にして公の患ひに十倍しき。衆醫總に顧みざるに到る。百端を窮むといへども救ふべきの術なし。此において上下の神祇に祈て、天仙の冥助を請ひ願ふ、何の幸ひぞや、計らずも、此の軟酥の玅術を傳受する事を、

歡喜に堪へず、綿々として精修す、未だ期月ならざるに、衆病大半消除す。爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ。癡々兀々、月の大小を紀せず。年の潤餘を知らず。世念次第に輕微にして、人欲の舊習もいつしか忘れたるが如し。馬年、今歳何十歳なる事もまた知らず。中頃、端由有て、若州の山中に潜遁する者、大凡三

十歳、世人都て知る事なし。其中間を顧るに、恰も黄粱半熟の一夢の如し。今、此山中無人の處に向て、此枯槁の一具骨を放て、太布の單衣、纔かに二三片を掛け、嚴冬の寒威、綿を折くの夜といへども、枯腸を凍損するにいたらず。山粒すでに斷えて穀氣を受けざる事、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒

の覺えもなき事は、皆、この觀の力ならずや。我、今、既に公に告るに一生用ゐ盡さゞる底の祕訣を以てす。此外更に何をか云んや。と云て、目を收めて默坐す。予も亦た涙を含んで禮辭す。徐々として洞口を下れば、木末纔かに殘陽を掛く。時に屐聲の丁々として、山谷に答ふるあり。且つ驚き、且つ怪んで、畏づ〳〵

回顧すれば、遙かに幽が巖窟の離れて、自ら送り來るを見る。卽ち曰く、人迹不到の山路、西東分ち難し。恐くは歸客を惱せん。老夫しはらく歸程を導ん。と云て、大駒屐を着け、瘦鳩杖をひき、巉巖を踏み、嶮岨を陟る事、飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙かに里許を下て、彼溪水の所に到て、卽ち

曰く、此の流水に隨ひ下らば、必ず白川の邑に到らむ。と云て、慘然として別る。且らく柴立して、幽か回歩を目送するに、其老歩の勇壯なる事、飄然として世を遁れて、羽化して登仙する人の如し。且つ羨み、且敬す。自恨む、世を終るまで、此等の人に隨逐する事能はざる事を。徐々として歸り來て時々に内觀を潛

修するに、纔に三年に充たざるに、從前の衆病、藥餌を用ゐず、鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみにあらず、從前手脚を挾む事得ず、齒牙を下す事得ざる底の難信、難透、難解、難入底の一着子根に透り、底に徹して、透得過して、大歡喜を得る者、大凡六七回、其餘の小悟怡悅踏舞を忘るゝ者數をしら

ず。妙喜の謂ゆる大悟十八度、小悟數を知らず。と、初て知る、寔に我を欺かざる事を。古しへ二三緉の襪を着くといへども、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今既に三冬嚴寒の日といへども、襪せず、爐せず、馬齒既に古稀を越えたりといへども、指すべき半點の小病もまたなき事は、彼の神術の餘勳なら

んか。云ふ事なかれ、鵠林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して以て、佗の上流を誑惑す。と、是宿とに靈骨有て、一槌に既に成する底の俊流の爲めに設くるにあらず。癡鈍予が如く、勞病予に類ひする底、看讀して子細に觀察せば、必ず少しき補ひならんか。只恐る、別人の手を拍して、大笑せん事を。何が故

ぞ、馬枯萁を咬んで、午枕に喧びすし。

明治四十二年九月十日印刷
明治四十二年九月十五日發行

定價金拾八錢

不許複製

校閲者　濱野知三郎
發行兼印刷者　東京府豐多摩郡大久保村大字西大久保四百五十九番地　山本完藏
發行所　大阪市東區淡路町三丁目二百十六番邸　山本文友堂

發賣元
東京市日本橋區本石町三　振替口座東京一七四四番　至誠堂書店
大阪市東區備後町四丁目　振替口座大阪四十三番　寶文館書店

海軍大佐子爵 小笠原長生閣下題字
東京帝國文科大學講師 佐々木信綱先生題歌
濱野知三郎校註

抄註 平家物語

総クロース 金文字入 頗美本
特價金參拾錢
郵送料金四錢

右は平家物語の中より、最も諷誦すべき條々を抄錄して、之に註釋を加へたるもの、學生諸君が課外の好讀物たるべきは勿論、又一般人士の愛讀すべき書なり。

發行所 大阪市東區淡路町三丁目 山本文友堂書店
振替口座東京四十六番
振替口座大阪二三六番

216
815

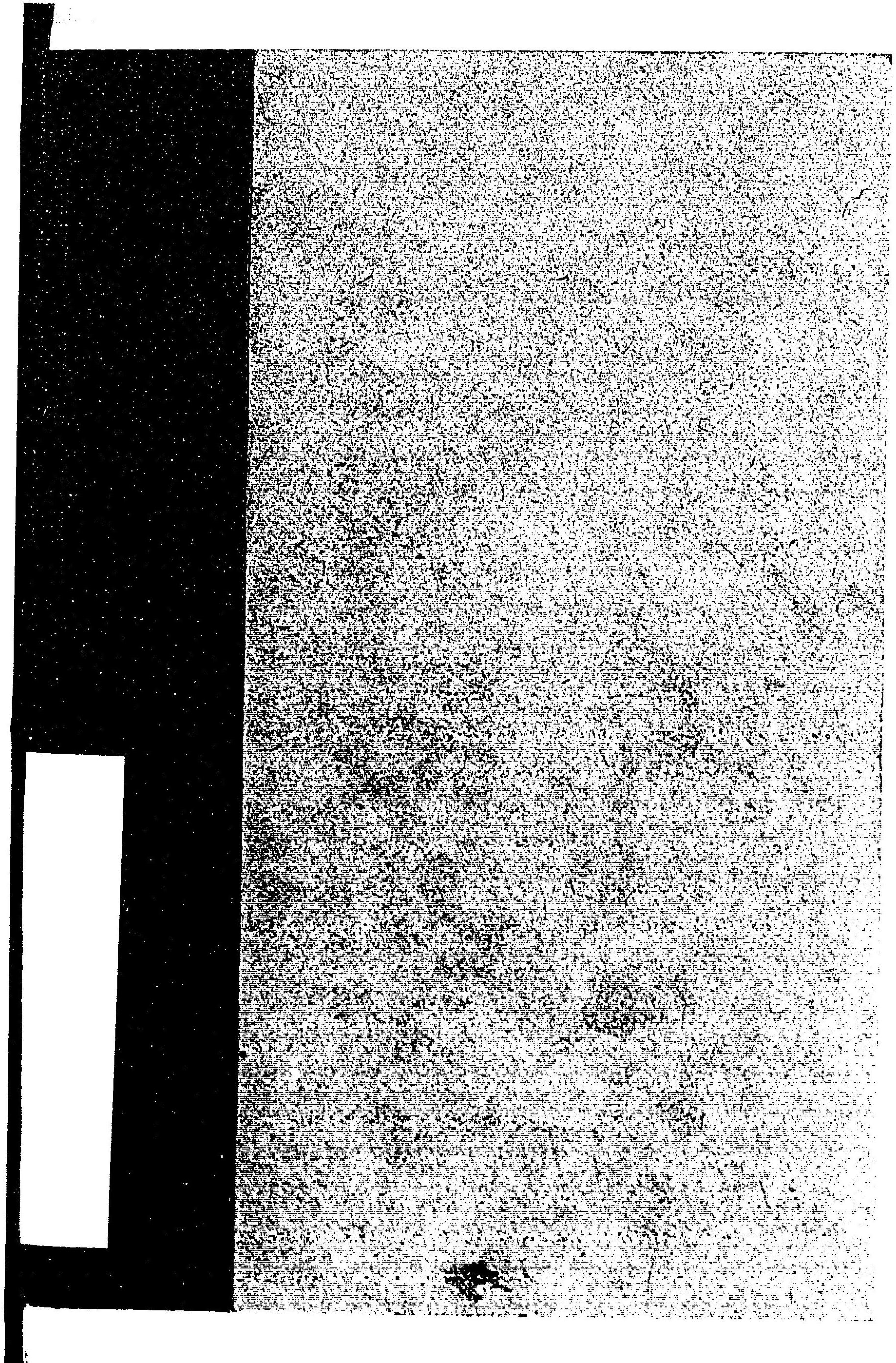
奥村恒次郎先生註釋
濱野知三郎先生索引

定價金八拾錢也
特價金六拾五錢
郵送料金六錢也

袖珍三五形金文字入總クロース頗美裝
舶來ゴロス紙印刷**六百八十八頁全一冊**

本書は本文に訓點を附し更に讀方を示し次に平易にして最も解し易く註釋をなせり、其丁寧懇切なる他に類を見す、一讀何人もよく聖教の大旨に通じ精神修養の資料となす事を得べし尙卷末に添へたる索引は論語中の或一語を知りて其全文を知らざる時の用に供するものにて其便益なるは云ふまでもなく發行以來大に讀者の賞贊を博せり。殊に裝釘は袖珍三五形なるを以て携帶至便なれば行住坐臥常に愛誦して修養に資せられん事を切望して止まざる也

發行所　大阪市東區淡路町三丁目　振替口座東京四十六番　振替口座大阪二三六番　**山本文友堂書店**



特61
254

夜船閑話

国立国会図書館

019868-000-1

特61－254

夜船閑話

浜野　知三郎／校

M42.9

ABG－0700